

○事務局

皆様、こんにちは。本日は、お忙しい中お集まりいただき、ありがとうございます。

会を始める前に、事務局から連絡をさせていただきます。

本会は、会議録を公開しており、その作成の為に御発言を録音させていただきます。御発言はマイクを使用し、発言の前にお名前を言っていただくようお願いいたします。

○委員長

ただ今から、第4回静岡県社会教育委員会を開催いたします。

それでは、本日の次第について確認します。最初に、事務局から、第3回社会教育委員会の概要を報告します。次に協議に入りまして、まず、委員と委員からそれぞれ事例発表をしていただき、皆様に意見交換をすることとおして社会教育人材等について、より理解を深めていきたいと考えております。最後に、本日のメインである社会教育人材に関する調査について、設問内容や回答方法、選択肢等について御意見をいただければと思います。

委員の皆様の御協力のもとに、円滑に会を進行いたしますので、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、第3回社会教育委員会の開催結果について、事務局から報告してください。

○事務局

お手元の資料1を御覧ください。第3回社会教育委員会では、令和7年度県社会教育課所管事業について、事務局より説明し、その後委員から質問を受けました。次に、第2回社会教育委員会と第1回ワーキンググループの概要について報告しました。

協議では、まず、本委員会として捉える多様な社会教育人材についてイメージを共有しました。その後、委員から裾野市立南小学校における地域学校協働本部の実践についての発表を聞き、質疑をとおして実践の理解を深めました。最後に、社会教育人材に関する調査の設問内容について協議し、設問の意図の明確化と表現の改善を図りました。また、設問の回答形式や、調査導入部の工夫について各委員から御意見をいただきました。

皆様の御意見を踏まえ、調査の改善案を資料3に整理いたしました。以上です。

○委員長

ただいまの報告について御意見がありましたらお願いします。

それでは協議に移ります。まずは、「(1)委員による事例発表及び意見交換」です。

委員、発表をお願いします。

○委員

本日は、このような機会をいただきまして、ありがとうございます。よろしくをお願いします。

私は、5月23日の総会をもちまして、2年間務めた静岡県PTA連絡協議会の会長の職を任期満了で退任をいたしまして、現在、顧問でございます。

ただ、これまでPTAに関わってきた経験をもとに、報告をいただけないかという御依頼をいただきました。本日は、PTA活動についてというよりは、どちらかというと、その活動に関わっている社会教育人材に焦点を絞る形でお話しできればと思います。ただ、PTA活動についても報告をさせていただかないとわからないところもあると思いますので、県P連の活動紹介も兼ねながら少しお話をさせていただきたいと思います。

私の略歴ですが、北海道の釧路市で生まれまして、名古屋を経て静岡に参りました。現在は、静岡に住んでおります。以前は、静岡大学に12年間務めておりまして、最後は法科大学院に所属しておりましたが、残念ながら入学者が少なくなったため、募集停止となり、現在は、既に廃止されております。その関係もありまして、2016年から中央大学に移籍いたしました。既に10年目となっております。

いろいろやっておりますけれども、どちらかというと自治会とかPTAの活動が私にとっては比重が大きいような感じです。PTAは静岡市立大谷小学校で父親委員を務めたのが2012年ですが、2014年に大谷小学校の会長になった時に、ちょうど輪番で回ってきた静岡市のPTA連絡協議会の理事を務めることになりまして、それから市のPTAには足かけ11年にわたり役員を務めました。その後半の3年は、静岡市PTA連絡協議会の特別理事を務めながら、静岡県PTA連絡協議会で副会長と会長を務めることになりました。現在は、静岡市の役職は全て退任して、静岡県の顧問を務めております。子供が進学した高校で、まだPTA活動は続けています。そのほか、地元の自治会でも、この間、町内会長を2回務めました。

自己紹介はこのあたりにして、まず静岡県P連の活動について紹介したいと思います。

静岡県P連は、現在、県内23地区の協議会・連合会から成り立っております。全ての市町がこちらに所属していただいています。政令都市だけ独立している県もありますが、静岡の場合には、静

岡市も浜松市もいずれも静岡県P連に所属しております。会員数ですが、今から10年前は35万人ぐらいいたわけですが、現在は25万人を切っております。毎年5,000人から1万人減っておりますので、恐らく今年は23万人台であろうと予想をしております。少子化がかなり進んでおりますので、かなり厳しい状況下にあります。

このように、静岡県P連は会員が大分減ってきております。この先、静岡県の人口減少とともに会員数がどんどん減少していきますから、大変厳しい状況かなと思っています。

子供の数について言いますと、例えば、三島市では、昨年の小学校の入学者が500人、中学校の卒業生が1,000人だったのだそうです。つまり、10年たたないうちに子供は半減するわけですが、恐らく全市町がそういう傾向ではないかと思います。

さて、私が県P連会長を務めた2年間は、「家庭・学校・地域が連携し、ともに子供を育むPTA活動の推進——コミュニケーションを重ねて、新しいPTAの形を創り出そう」ということをスローガンとして掲げてまいりました。まずは、手探りで1年間やってきましたが、昨年の6月に開催された総会の段階で、県P連には大変大きな課題があることがわかってまいりました。そこで、検討すべき4つの課題を掲げて、それを残る1年間で克服していこうと考えました。

第一に、活動内容のあり方の見直しです。従来の慣習などに従って、何となくやっていたものを見直すことから始めようと考えました。

第二に、厳しい財政の見直しです。子供が減っていけば、当然会員も減り、会費も減るわけですが、支出自体はほとんど変わりがない状況でした。こういった状況では、早晩、破綻することは目に見えているので、立直しを図ろうと考えました。

第三に、静岡県P連は、せっかく大きな組織であるのに、これまで県P連として、特定のテーマについて緊急要望をしたことは一度あったようですが、恒常的に何かを要望したことがないので、これをやろうと考えました。

第四に、広報活動を充実させ、県P連の活動を「見える化」して、県P連の活動に理解を深めてもらおうと考えました。

第一の活動内容のあり方の見直しとして一番大きかったのは、公益社団法人日本PTA全国協議会からの退会です。日本PTAでは役員が1,200万円も横領する不祥事があったにもかかわらず、執行部が真相究明や説明を全くしようとしないうえ、静岡県P連としては二度にわたって改善を求めて質問状を送ったのですが、いずれもほぼゼロ回答でした。そのこともあって、2月に開催した臨時総会において全会一致で日本PTAからの退会を決意いたしました。詳しくは、県P連のホームページを御覧いただきたいと思います。

第二の財政の立直しのためにまず行ったのは、徹底した経費削減です。例えば、つまらないことかもしれませんが、感謝状の大きさを半分にして事務局で印刷できるようにして、10万円ぐらいの支出を減らしました。また、県のPTA研究大会を開催して、後で御報告する各学校の活動報告もそこでやっていただいたわけですが、こちらでは協賛金を募ったところ、50万円ぐらい集まりました。さらに、従来の会費を維持しつつ、これまで有償で販売していた県P新聞を、完全オンライン化して無償にしました。結果として、各地区P連の負担は減ることになりました。それと同時に、これまで通常会計の赤字を補填するために行ってきた特別会計からの繰入れを、大幅に減らしました。これらのことを踏まえると、財政再建にはある程度成功したかなと思います。

第三の県への要望については、県社会教育課の皆様にご協力をいただきまして、県知事、教育長宛ての要望書を、池上教育長に面会して直接お届けをすることができました。また、2か月たたないうちに回答もいただきました。いずれも県のホームページで公表をしておりますので、そちらもご覧ください。この要望活動については、今後も県P連としては続けていきたいと考えているところです。

第四の広報活動の充実については、ホームページを小まめに更新するようにいたしましたので、情報についてはかなり強力で発信しているのではないかと考えております。ぜひ一度、静岡県P連のホームページを御覧いただければと思います。

さて、本委員会に直接関係しそうなことに話を移したいと思います。昨年度、静岡市民文化会館において、静岡県PTA研究大会静岡大会を開催いたしました。静岡県P連では、2年に一度、この大会を開催しております。県内の東部・中部・西部の各地域から各1校ずつ研究実践委嘱校をお願いいたしまして、2年間にわたって研究活動をしていただき、その成果を大会で報告していただいております。今回は、大会で行われた3つの報告のうちから二つについてご紹介したいと思います。いずれも詳細については、県P連のホームページに掲載してありますので、そちらをご覧ください。

まず、東部地区の三島市立沢地小学校PTAの活動報告の内容を紹介します。沢地小学校には、「粋なおやじの会」というPTA組織の健全育成部から派生した組織があり、保護者やかつての保護者の有志で運営されています。「粋なおやじの会」という名前ではありますが、母親も参加できます。

具体的な活動としては、運動会のテント張り、片付け、PTA整備作業という校内のこともあるのですが、ここで注目したいのは、「イザ！カエルキャラバン！」という防災について楽しみながら学ぶイベントを子供たちと一緒に実施したという点です。もう一つ、「学校に泊まろう」という

防災宿泊イベントを実施したそうですが、なんと、100名を超える子供たちがこれに参加をしたそうです。特筆すべきは、これは「粋なおやじの会」のメンバーだけではなく、保護者ボランティアや沢地小学校を卒業した中高生ボランティアが参加して運営されたという点です。報告では、すべてを「粋なおやじの会」に任せるのではなく、自分の子供とともに参加し、地域の大人として子供たちを身守ってくれた保護者が多くいたのはありがたかったという話もありました。この保護者や卒業生の保護者の有志でつくっている「粋なおやじの会」が、多くの人たちに輪を広げて、地域の子供たちと一緒に活動が行われているというのは、大変興味深い報告であったと思います。

続いて、西部地区の磐田市立東部小学校PTAの活動内容の報告を紹介します。

東部小学校では、保護者が、地域の方も含めて図書のボランティア活動を行っています。具体的には、掲示などの環境や本の整備、本の読み聞かせをしています。このような活動は、他の学校でも行われているとは思いますが、東部小学校では、PTA会員だけではなく、地域の方も参加しているところが特徴的かなと思います。

また、PTAを中心に役員が挨拶運動をしているということで、子供たちが元気に挨拶をして、登校するときの様子も紹介されております。

あと、たいへん興味深い取組みとして、運動会でのKTAダンスが紹介されています。KTAの「K」はきれい、「T」は友達、「A」は挨拶を意味します。これが東部小学校の自慢ということで、音楽に合わせてダンスを踊るのだそうです。こちらは、運動会で保護者が参加する種目とされているということで、実際に、子供と保護者が一体となって踊っているそうです。

さらに、「PTAの日」というイベントではバザーを実施しております。ここでは、バザー自体に注目するのではなく、その合間のイベントが大変注目されます。どういうことかというと、バザーが2部制なので、その合間で児童が楽しめるように、モルックや英語でのじゃんけん、輪投げのブースを設けて、その中で異文化交流をしているのだそうです。子供や地域の人たちと一緒に国際文化に親しむ機会をつくっている点は、大変注目できるところかなと思います。

このようにPTAの活動では、地域の子供たちのために地域の人たちが積極的に協力してくれています。保護者はもちろんですけど、かつての保護者、つまり子供は卒業したにもかかわらず、学校に愛着をもって活動をされている方がたくさんいらっしゃいます。それから、自分たちが通った小学校や中学校に卒業生が戻ってきて、いろんな活動を手伝ってくれることもあるわけです。

もちろん地域の方々もそうですが、他にも協力してくれる方々はたくさんいます。私が住んでいる静岡市駿河区の大谷地区には静岡大学がありますので、例えば、大谷小学校の放課後こども教室には、毎回、十名前後の大学生が参加をしてくれて、子供たちと一緒に関わってくれています。

こういったことを考えると、実はPTA活動は社会教育人材の宝庫なのではないかと考えられるわけです。

PTA活動については、少子化によって児童生徒の人数が減っていきますので、これを持続させていくためには、時代や地域の実状に合った活動に変えていく必要がありますし、また、社会の中でPTAに対しては大変厳しい視線が注がれているわけですので、こういった中で多くの方々の理解と協力を求めていく必要があります。

そういう意味では、子供たちのために、地域の皆さんとPTA活動自体も力を合わせてバトンを未来につないでいくことを、これからもずっとしていかなければなりません。

ちなみに、PTAというと上部団体を頂点とするピラミッド構造という形で紹介されることが多いわけですが、今やPTAはそういうものではありません。むしろ、これからのPTA活動は横につながるものであり、県P連は、そのつながりを作るコミュニケーションの場の中心である、つまり、決して頂点ではなくて中心であって、輪の中心にあるものです。

今回、沢地小学校と東部小学校のPTAの活動事例を紹介させていただきましたが、県P連は、こういった各学校におけるさまざまな実践事例を共有しつつ、実は各学校に存在する社会教育人材に、いわば、こういうやり方もあるぞ、ああいうやり方もあるぞと数多く学んでいただきながら、それぞれの学校の状況に合わせた取組をしていくための情報提供の場であり、そうした人たちをつなげていく、また、そうした人たちがつながっていくコミュニケーションの場としての役割を担っていくべきだと考えて2年間会長を務めてきましたし、これからもそうあってほしいと願っているところです。

非常にざっくりばらんな形で、取り留めのない報告になりましたけれども、結論だけ申し上げますと、PTA活動に関わっている方には、かなりの数の社会教育人材がいます。ただ、意識的にそういった目で見えていなかったから、現在、PTA活動はPTA活動、それ以外の活動はそれ以外の活動という形で捉えられているのかもしれませんが、実は少子化が進む中で保護者だけでは手が足りず、地域との関わりが強くなっている学校が増えています。逆に言うと、学校だけではいろいろなことができなくなっている学校もたくさんありますので、各地域のいろんな人材をつなぐ場として、学校はもちろんのこと、PTAも機能するのではないかなと個人的には考えているところです。

ざっくりとした報告になりましたけれども、御清聴ありがとうございました。これで、私の報告は終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

○委員長

それでは、皆様のほうから御質問、御意見等はございますでしょうか。

○委員

発表、ありがとうございました。

最後の確信的な部分に、どうしても意見を伺いたいです。PTAでやってらっしゃる方々は人材の宝庫である、まさにそうだと思うんですが、なかなかPTA活動を終えてしまうと、社会教育の場にそういった方々がそのまま続いていくというか、形を変えてもいいですけど、その人材が少なくなっているように思うんです。ここの接続、あるいはPTA活動から一般の社会活動に人材がそのまま移っていくためには、何が必要なんですか。あるいは、何が今ネックになっているんですか。

○委員

まさに、当たり前だと思いますが、自分のお子さんがいるから頑張るという保護者が多いことは事実です。ただ、実際に数はそう多くはないかもしれませんが、何かをきっかけにして学校とのつながり、また地域とのつながりが続いていく、そして人のつながりが続いていくこともあると思います。

二つの例を挙げます。一つの例は、私の子供が通った静岡市立大谷小学校は、昨年、開校150周年を迎えて、記念行事や記念事業が実施されました。この記念行事や記念事業の実行委員会は、PTAももちろん関わっているのですが、過去のPTAの役員を経験した方々が実行委員として中核を担いました。実行委員長も、お子さんが卒業したPTA会長経験者です。そういった方々が、今度、150周年があるけれどもPTAだけでは大変だから、ぜひ実行委員会つくろうということで動いたわけです。

実は、150周年が来ることはもちろんわかっているものですから、学校の校長先生や教頭先生から、150周年に記念の行事に向けて実行委員会をつくりたいというお話が私のところにもありました。ただ、私は140周年記念行事と記念事業の実行委員長だったものですから、また150周年で出しゃばるわけにはいかないだろうということで、もちろん協力はしますが、ほかの方にお任せすることにしました。

そういった学校からの働きかけを受けて、PTA会長経験者はもとより、施設整備等に協力するPTA父親委員長等の役員経験者を中心に前後数年の保護者に呼びかけをしたところ、そういうことだったらぜひ協力したいということで、もう小学校にはお子さんがいらっしゃらない方々が、自

分の子どもたちがお世話になった小学校のために、そして何より子供たちのためにいろいろやってあげようということで集まって、現役のPTA役員も巻き込む形で実行委員会ができました。

そういう意味では、学校や、あるいは中心となって動く人物がある程度働きかけをすると、一定の人数が集まるのかなと思います。

もう一つの例は、私の子供が通っていた隣の学校での取組です。こちらは、現在、児童生徒数が激減をしております、今、かろうじて100名を超えていますが、もうじき100名を割るかもしれない状況です。この学校では、現在、PTA会長務めている方が大変エネルギッシュで、このままだと、学校だけでは行事もままならなくなる、運動会やほかの行事もこじんまりしてしまっていて、やりたいこともできなくなるということで、地域の皆さんに学校に関心をもってもらうように、そして学校行事等に参加してもらいたいという働きかけをしておられます。

実際に、自治会連合会長も含めて大変協力的だそうで、今年からは、いろんな学校行事に地域の方々も積極的に参加していこうという動きがあると聞き及んでおります。そういった形で地域とのつながりをつくっていくという取組が行われているわけですが、当然、そこには、保護者だけではなくて、卒業生や地域にいる元保護者、そういった方々も当然参加していくことになるかと思えます。

長くなりましたが、御質問について端的にお答えすると、PTAは人材の宝庫であるとして、社会教育へつなげていく人材、そして、そこへつなげることを働きかける人材がどうしても必要になってきます。そうすると、社会教育人材を直接掘り起こすというよりは、社会教育人材を集めるための人材を掘り起こすことが必要なのかなと感じているところです。

大分長くなりましたけど、御質問の趣旨に沿いましたでしょうか。以上でございます。

○委員

1点だけ所感を申し上げます。今、御回答を聞いていて、確かに集めるための人材も必要かなと思いますけど、特に大人を動かすには大義名分なんだろうなとも思いました。誰でもいいから、これを手伝ってくださいでは来ないですけど、あなたの力がどうしても必要なんですと言うと動き出す。この大義名分をいかにつくるか、共有するかが、もしかすると宝庫である人材を一人一人動かす一つのきっかけになるのかな、今、事例二つ伺ってて、思い浮かんだことでした。ありがとうございました。

○委員

全くおっしゃるとおりだと思います。例えば、大谷小学校の学区には、片山廃寺という、まもなく駿河国分寺という名前に変わるようですが、国の指定史跡があるのですが、大谷小学校のPTAは、静岡市の文化財保護課から委託を受けて、年に5回草刈りをしています。ところが当然、保護者もなかなか忙しいので人の集まりが悪かったときに、150周年記念行事や記念事業で中核を担った人たちが、草刈りをみんなで手伝おうよと呼びかけたら、それは保護者でなくても大丈夫だろうということで、結構集まったりしたこともあります。

ですから、大義名分が「大」じゃなくても、もしかしてよいのかもしれませんが。「小義名分」と言うのであれば、小さな目標であっても、何かしら目的を示して、ここに集まれということであれば、恐らく多くの人々が、それだったらできるよということで参加してくれるのではないかなと思います。今、先生のお話を聞いていて、そう思った次第です。

また長くなりました。以上です。

○委員長

そのほかはよろしいですか。

○委員

それぞれの学校でPTA活動をやっていくにあたって、学校の先生、PTAのTの役割が大きいと思います。教師の多忙さは話題になっているんですけど、どの学校でも管理職の先生がPTA活動の事務局機能をやっておられるのか、それとも一般の教員の先生がやってらっしゃるのでしょうか。その辺の実状をお聞きしたいんですけど、お願いします。

○委員

今のお話ですが、従来は学校の管理職を中心に、先生方に頼るところが非常に多かったと思います。学校の先生方が、子供たちの希望やいろんなことが一番わかっているところもありますし、保護者はどうしても昼間になかなか学校に来るのが難しい状況もあります。そういった中で、先生方にいろいろとお願いして、またPTAとしても、いろんな会議は夜にやるしかないものですから、その際に先生方にお越しいただくことも多かったかなと思います。

ただ、今、御承知のように、教員の働き方改革が進んでいる中で、これは別に先生方が動かないとかそういうことではないのですが、先生方をお願いして動いていただくことが難しくなってきた

いる状況もあります。ただ一方で、学校の先生方が昼でいろいろなことを終わらせたいと言っても、我々保護者は、どうしても夜とか休日でないといけないという状況があります。保護者が仕事を休んで来るしかないということになってしまうと、それはそれで、まさに本末転倒になりますので、その間のバランスの取り方が非常に難しいと思います。

ただ、保護者もまだまだ意識が変わり切っているわけではありませんけれども、学校の先生方が、十分に対応する時間がなかなか取れなくなっていることもあり、学校も、PTAや学校応援団にお願いしようという動きもありますし、また、それに対して保護者やその地域の人たちが応えていこうとする気持ちが、もちろん昔からありましたけれども、だんだん強くはなっているのかなというところがあります。

ただ、難しいのは、残念ながら、先ほどの人材の話ではありませんけれども、常時、学校に関わって何かをするというと、例えば、従来でいうところの専業主婦の方々をお願いすることになるのかなと思いますが、そういった方々が年々減っている中で、先生方にまだまだ頼っているところが非常に多いところは否めないかなと思います。

この辺は、あちらを立てればこちらが立たないということで、なかなか難しいところです。おっしゃったように、先生方の役割は、昔とは変わってきていると思いますが、まだまだ大きいかなと感じています。

お答えになってないかもしれませんが、以上です。

○委員長

では、委員、お願いします。

○委員

今の委員の質問にも関連ですけど、私がPTAの事務局等のこともやっていて、先ほどの先生方の働き方改革に伴って、働き方改革で削減する業務の中にPTA活動も入ってしまったような現状もありまして、PTAが何かをやろうとしたときに、ちょっと先生方が難しいので、そこは御遠慮くださいよということで、活動が減っていつてしまっていることも現実としてあります。

こういう言い方はちょっと強い言い方になってしまって恐縮ですけど、管理職の先生方って、二、三年で地域を去ってしまって、管理職の先生は、まずは先生方が働き方を改革して、学校の業務が軽減されることによって、子供たちのためになることを第一に考えてらしたと思うのです。そこで、地域のことは難しいからといって削減してしまうと、管理職の先生方が削減したものが、今度は地

域の社会教育人材が、学校のことに協力するという土台がだんだん薄れてきてしまうことを非常に危惧しております。その辺りについては、どのようにお考えでしょうか。お考え聞かせていただけますでしょうか。

○委員

おっしゃるように、教員の働き方改革が進む中で、先生方にとってPTA活動がかなり負担になっているという実態があると思います。特に管理職についても、その中でPTAとの関係で一番大変なのは教頭先生ですけれども、教員の働き方改革の中で、学校としてPTAとの関わりについては少し見直していこうという動きも確かにあります。

一方で、地域差や学校差もあると思います。例えば、私の子供たちが通った大谷小学校は、生徒数350名ぐらいの中規模校ですが、昔から地域との関わりが非常に強いところです。例えば、交通安全の旗振りについては、以前は保護者が輪番で年に数回やっていたのですが、保護者も大変だということで、私がPTA会長を退任してから数年後に年に2回だけやればいいですよ、という形に変わりました。そうすると朝の通学時間に保護者が立っていない日のほうが多くなってきました。そうすると地域の社会福祉協議会を中心に、それだったら、いつ誰がどこに立ってくれと言われたら困るけれども、都合がつくときに立つということであれば立つよ、という形で、登下校の際に子供たちを見守ってくれています。

このように、旗振りに限らず、子供たちが関係することに合う地域の人が比較的に入ってきやすいということもあると思います。ただ、誰が対応するかということ、結局は、学校の先生になってしまいうことが多いものですから、その点のジレンマがあります。

いずれにしろ、教員の働き方改革とPTA活動の両立はなかなか難しいところがあります。両立させるために考えられる方法は、二つあると思います。一つは、PTA活動そのものを見直すことによって、できるだけ負担の少ない形でいろんなことをやるようにして、その中で、子供たちのために、本当に子供たちが楽しんでくれることをやるということです。もう一つは、学校と保護者だけでやるというと、どうしても学校に頼る可能性が高くなってくるので、元保護者をはじめとする地域の方々を巻き込んで、先生方の負担をできるだけ少なくする形で、しかし、子供たちが楽しい思い出をつくる場を確保するということです。そういったことを模索している学校もだんだん増えてきていますし、将来的には恐らくそうなるのが主流だろうと思います。

今の委員の本当に御質問は、私自身も頭の悩ませるところでして、たしかに両立しにくいところです。もっとも、ただやることを減らすというのではなくて、先生方が今まで労力をかけてきた部

分を補う仕組みをどう作っていくかというのが課題だと考えています。

ただ、これも結局、それを主導する人がいるかないかということに関わってきますし、地域や学校のそれぞれの特性や規模によって変わってきます。大きな学校だったら人が簡単に集まるかという、誰かがやってくれるだろうと思うから、逆に人が集まりにくいというのが現実です。ですから、そういう規模感とかもありますし、学校の地域で根づいている歴史やそういったものもあると思いますので軽々には言えませんが、何かしら地域とともに取り組んでいくという方向性で考えていく必要があるだろうとは思っているところです。

また、お答えになったかどうか分かりませんが、以上でございます。

○委員

難しい質問でしたのに答えていただきまして、ありがとうございます。

○委員

こちらこそ、ありがとうございます。

○委員長

委員、お願いします。

○委員

委員でございます。委員、事例発表、ありがとうございます。

委員の事例の発表の中で、PTAは社会教育人材の宝庫だよとおっしゃっておいりましたけど、今でも会員が毎年5,000人から1万人ずつ減っていくとおっしゃっておいりました。さらに、今、どっちかというPTA離れもお聞きしていますが、その辺の現状と課題についてはいかがお考えでしょうか、その辺でのお考え等がありましたら、お聞きしたいと思います。

○委員

まさに、この2年間ぶつかってきた問題でございます。一つは、会員が減っているのは少子化も原因ですけれども、もう一つは、今、PTA離れという話もございましたが、もともとPTAは任意団体であるという意識が保護者の間で強まって来たことも原因です。

ただ、私自身は、PTAは大変大事な組織であると考えています。もちろん、一人一人の保護者

がそれぞれいろんな思いをもっているのももちろん無理強いはできないですけども、そういった思いを実現するためには、ある程度のまとまりがないといけませんし、また、学校との橋渡し役になってそのまとまりを作っていくのもPTAだと感じているところです。

そういう中で、今まで何が問題だったかという点、結局はPTAに対して批判があっても、ほっかぶりをするとか、何を言われても聞く耳を持たずに現行どおり維持していくとか、そういったことが非常に多かったこともあります。私は、昨年、結局、県内23地区のうち11市町を回りまして、それぞれ厳しいお話も伺いながら、それを踏まえて、いろんな改革を続けてまいりました。

実は、静岡県P連の活動に疑問を呈する声もあったのですが、いろいろコミュニケーションを重ねていく中で、子供たちのために一緒にやろうじゃないかということでご理解をいただいたところもあります。

もちろん、PTA離れの動きが強まっていますし、いくら話しても通じない方はもちろんいらっしゃるのですが、その一番の原因は、コミュニケーションがきちんと取れていないこと、そして取ろうとしてこなかったことにあると思います。PTAってあって当たり前前の組織ではありません。PTAという組織で、子供たちのために何をやるかという意識をもって、みんなでしっかり共有を図っていくことによって、一定の活動を続けていき、組織を維持していくことは可能であると考えているところです。

ただ、少子化が確実に進行していく中で、PTAの組織の在り方自体も見直していかないとなりませんし、そのほかにも課題はありますけれども、きちんと向き合って、いろんなことに真剣に取り組んでいくことが必要だと思っています。

ただ、ものすごい労力が要りますので、皆さんにそれをやってくださいとはなかなか言えないところもありますけれども、そういったことをしていく人が出てこない、なかなか変わっていかないのかなと感じているところです。

話がそれたかもしれませんが、以上のとおりです。

○委員長

それでは、時間が予定よりは押しているものですから、委員の発表に移りたいと思います。

○委員

ありがとうございました。

○委員長

続きまして、委員の事例発表をお願いしたいと思います。よろしくお願いします。

○委員

私のほうでは、静岡大学での実践で発表させていただきます。このような機会をいただきまして、ありがとうございます。私のこれからの発表は、特に社会教育活動ではないですけど、今回の御諮問にあるつながりで、私なりに関連するかなと思う、私なりの活動について発表させていただこうと思います。いろいろ意見を聞かせていただければと思います。

大きく二つ、静大フューチャーセンターという活動と、それから派生した「みんなのチャレンジ基地 ICLa」イクラと読ませます、ICLaのお話をさせていただきます。

フューチャーセンター、センターという名前ですけど、建物を示すわけではなく、イメージをつけていただくためにここにやっておりますけど、多様な人たちが集まって、何かにぎやかくやっているイメージです。フューチャーセンター、プログラムの一つとか、ディスカッションの一つの形態とイメージしていただければよいかと思います。

フューチャーセンターというのは、私が勝手に名前をつけたわけではなく、ヨーロッパの企業が、96年だったですか、ある保険会社が、過去の価値にとらわれず、未来の知的資本となる価値について経営層が議論し、少し会社の会議室を離れて、自由に意見を聞きながら会社の未来を語っていくという場がフューチャーセンターの発祥とされています。

日本では2000年頃に少しずつ入ってきて、大きく転換したのが東日本大震災とされています。地域に入っていて、自由な雰囲気の中で、立場とか肩書きなどを超えて、いろんな意見交換をする場として展開されました。今、自治体でも、このフューチャーセンターという場をつくって、コミュニケーションを図っているというところもございます。

静大フューチャーセンターという名前をつけてスタートしたのが、ちょうど12年前です。この中にも御存知の方はいらっしゃると思いますが、今、NPOの代表理事も、静岡大学でも特任の教員をやってくれていますけど、Aさんが当時、静岡大学の学生で、私とたまたまある授業で関わったという関係です。指導教員でも何でもありませんし、部活動とかサークルの関係でもなかったんですけど、たまたまな出会いで話をしていたときに、Aさんが当時言っていたのは、まだ、今よりも地域に学生は出ていく機会がなかったということで、ただ、関わりたい学生はたくさんいるということと、そういうきっかけがないんだという話をしていました。

一方で、私は、民間から2011年に大学の教員としての仕事をスタートして、当時、コミュニケ

ーションという言葉が、特に私が関係する就職のところでもにぎわっていました。私の耳に入るのは、企業側から、いや、今どきの学生はという枕言葉でいろいろ話をされますし、コミュニケーション力が大事だという話をされるんですけど、私は、当時のAさんも含めて、いやいや、今の学生の方が、コミュニケーション力が高くて、まじめで、非常に能力が高い。でも、今の社会の大人は、今の学生はと少しネガティブに思っている。これを何とか解決したい。当時の学生も、社会で働くことへの不信感とか不安感が非常に高かった。こういう能力の高い人たちが、どうやって自信を持って社会に出るか、その場をつくりたいという思いでフューチャーセンターはスタートしました。ここにもあるところが、私の研究室で、平日の夜、テーマを掲げて、集まってやっていくというものスタートしました。

やっていく中で、地域課題解決、あるいは地域連携と非常に親和性が高いことで、大きなきっかけになったのが、ちょうど10年前に、伊豆の松崎町での発表をさせていただく機会がありました。この静大フューチャーセンターの活動をぜひ発表してくれということ、大学から声かけていただいて、発表したんです。そんなおもしろいもんだったら、松崎町でやってくれやと言われて、翌月、松崎町に学生たちと行って開いたのが、「in松崎町」というフューチャーセンターだったんですけど、ここが私としても大きな気付きの場になりました。

フューチャーセンターで、いろんな人が集まって、わいわいがやがややるだけのことだけではあるんですけど、当時者だけが集まってやっていることの、ある種、限界があるんだろうと思っていますし、みんなが担い手になることへのある種のリスクみたいなものがあるんだと感じています。そこに何も知らない学生が入っていくことで、それって何ですかとか、どうしたらいいと思いますかと利害関係なく聞くことによって、大人たちが最初はネガティブな話をしていたんですが、この町には何もないとか、ここは少なくなった、あれもなくなったって話をする中で、学生が入ることによって、いやいや、昔はもっとなかったところから、先人たちがいろいろつくってきたんだよなって話が始まって、いやいや、俺はこうありたいとか、いや、私はこのようになってほしいとか、そういうポジティブな話が引き出せるようになってきました。酒も飲まないで、こんな話をするのは初めてだと言われました。

その後、菊川市でもイベントをする人たちの後押しをしたり、南伊豆町でも、中学生と大人が話をする場に大学生が入って対話をつなげていったりしたことがありました。多様な人たちが対話をもって未来のことを語っていく、あるいは未来のことから今できることを考えて、バックキャストイングをやっていました。そうすると、今まで課題意識のなかった人が、それなら僕ができることは何かあるかなということでサポーターが増えてきたり、実際にリードしていく人たちが、やっぱ

りこの方向でいいんだと覚悟を決めていったり、そんなこともやっていった後に感じたことでした。

コロナ禍は対面で集まる機会がなかったですが、当時の学生の、ディレクターですけど、学生ディレクターたちが、いろいろ、こんなことやりたい、こんなことできるんじゃないかということでやってくれたのがありました。

「おしごと研究ナイト」は、当時、集まれなかったので、Zoomで、こういう人と話しをしたいというので、学生が話を聞きたい人。例えば、ここにサンプルでありますけど、仕事で外国語を使う人はどんな仕事をしているんだろうとか、メディア・広告業界って何となく興味あるんだけど、どんなものがあるか。人伝いに社会人が入ってきて、全国から社会人が入ってきて、学生も静大生だけに限らずにやっていました。多いと100人弱ぐらいで、夜な夜なこんなことをやっていました。つなげるのは、ここで初めて、オンラインでもつながるんだと実感していきました。

コロナ禍で次に派生したプロジェクトとして、プロジェクトというのは、フューチャーセンターはプロジェクトじゃなくて、僕らはプラットフォームと考えています。プラットフォームは限られた人のものではなく、誰でも参加ができるもの、いつでもやめることができるもの、そういったものをプラットフォーム。ただ、そこに何かがある、そこに人がいることに価値があるものがプラットフォーム。プロジェクトは何かの狙いを持ったものです。「みんなのチャレンジ基地 ICLa」をつくりました。静岡大学から1.5キロぐらいの小鹿2丁目に施設を借りて、スタートをしました。

なぜ、その拠点をつくりたかったのかというと、そもそも私の狭い研究室でやっていた対話の場が、コロナで、とてもそんな狭いところには人が集まらない。ただ、対話はできる機会がオンライン以外でもできないかということと、ちょうどAさんがNPO法人ESUNEを立ち上げてたんですけど、事務所の移転の場所を探していたのもありますし、コロナで非常に孤立する大学生がいたという実感もありました。

私のほうで、右にあるような、静岡鉄道さんとかアイザワ証券さん、いろいろ話をして、お金の座組も決めてスタートをしました。

施設を借りて運営するものですから、当初の見込みより少し値段が、金額が張って、年間300万円以上かかってくる。そのうちの3分の2ぐらいは、当初、大学からも、アイザワ証券を通じて支援をしてもらっていたんですが、実は、これは2年間で閉じました。収支がにっちもさっちもいなくなっていて、大学からの支援が2年間で終わることで、ちょっと自分たちの自前では難しいということで一旦閉めました。ただ、やってく中で、これは必ずそのニーズというか、そういうものがあると確信していました。

うちの大学に限らず、大学生、あるいは今の高校生もたくさんいるかもしれませんが、何かを

やってみたくとか、今から少し変えていきたいとか、自分が変わりたいと考えている学生が、なかなかその次につながるフェーズは、SNSの世界でしかないですけど、こういったリアルの人と人がつながることによって、いろんなものが生まれていたり、前へ進んでいたりしました。

一番その効果を上げたのが、私自身は実際にリアルの方が大事と思ってました。それはある種間違いでもないですけど、リアルの方はそこに行かないと会えないですが、学生が、ディスコードを使ってオンラインの場をつくりました。ICLaのクラウド版というか。そういったものを使うことによって、行かなくても人と会えたり、コミュニケーションが取れたり、リアルな場とオンラインが並列することによって、人がさらに集まったり交歓するようになりました。

そういう中で、何かやりたいことある？という形で学生が学生に聞いたところ、わっと集まってきた、こんなことやりたいとか、あんなことやりたいとか。これを見ながら、それだったら、私、ちょっとレクチャーできるよって大人が集まってやってきました。この中でも、もちろんできたものばかりではないですけど。最初の、竹問題について語りたから、最初に出てきて、放置竹林って大変なことになっているらしいよみたいな、そういったことで、ちょっと困っている人とか専門家から話が聞けるといいけどって言い出した学生に、こういう人知っているというのが重なって、それが実はずっと今でも続いて、一つのネットワークになっています。ですから、これはオンラインがなければできなかったことかなと思います。

最後のスライドです。前のこの会議でも申し上げたんですけど、やってみようが何か実現していくのを2年間見ている、場と仲間と情報が必要なんだろう。ただ、この情報が今、厄介だなと思っているものがあります。情報というと、特に若者はSNSで情報を見つけていきます。その情報を持っている人の思い込みが、次の人のさらなる思い込みに、負の連鎖が始まっているのではないかなと思っています。これを今、感じているのは、少し話がそれますが、私、今、就職支援をやっていて、大学生の就職の捉え方が、本当にちょっと厄介なものになってきたかなと思っています。表現すると、仮面舞踏会とか、何かアバターをつくるような、そういったものに就職活動を捉えていて、自分とは違うというか、理想のアバター、戦うために武器をそろえたりすることが就職活動をうまくいくことだと思いついて。それは彼らが勝手に思ったわけじゃなくて、いろんな情報の中から、それが正しいんだと思いついて。しかも、今の20代の人たちは、そういう就職活動を経て、何らかの職に就いていると、就職活動はそういうものだとか今度は後輩に教え始める。いや、自己PRをこういうふうに半分ぐらい嘘で盛っておけば大丈夫だという話が、まことしやかに普通に入っている。

ですから、この情報というのは、情報が必要なわけじゃなくて、正しい情報にいかにかたどり着く

かがすごく大事だなと思ってますし、やってみたいという人がやってみようぜという仲間を見つけること、試行錯誤する場が必要なだろうと、私の中では確信していたところでございます。

取り留めもない話ですけど、私の活動として発表させていただきました。御清聴ありがとうございました。

○委員長

それでは、委員の発表に、何か御質問、御意はございますでしょうか。

○委員

学生たちのいろいろなやる気を感じて、これが地域とつながっていると伺って、とても素敵な発表だったと思います。実際の学生ディレクターがいらっしゃるということですが、学生が地域とつながったり、いろいろプロジェクトをやったりする上での、学生ディレクターの特別な訓練であったり、何かスキルを身につけるようなものを得て、そのような役割を果たしているのでしょうか。その辺りについて教えてください。

○委員

当初は、Aさんが、いわゆるファシリテーション力を、後輩に勉強会を始めたところからスタートしています。いわゆる場を、例えば2時間のプログラムをどういうふうにつながっていくか、ファシリテーション力は、基礎的なものは教えています。今は私も大学で授業にしていますので、一部の学生がそれを勉強して、今のところはその勉強した人たちがディレクターを担ってくれています。ですから、こういうことをみんなで考えたいんだと言ったときに、どういうふうに組み立てて、自分のことにしていくかを学生なりに考えていく。

恐らく、学生が前に立ってやることの意味は、先ほど申し上げたとおりあるなど、すごく言葉を引き出してくれるなど感じていますので、そういうものを学生が実践していきながら、もっとこうしたほうが良いというのを、力を身につけていくんだろうと思っています。ファシリテーションの場の力のつくり方みたいなものは、彼らなりに、私も伝えて、一緒に勉強しています。

○委員

それこそ、PTAをどうしようかと思っている保護者の皆さんに、学生さんに仕切ってもらいたいなという思いもするようなところですよ。どうもありがとうございます。

○委員長

そのほかいかがでしょうか。

○委員

委員、ありがとうございました。参考になりました。

このような活動をしている学生はまさに地域の財産です。ところが、この世代の多くが東京志向というか、地元よりもやっぱり東京がいいという傾向があるようで、地域の課題ではあるんです。この活動している学生たちには、首都圏志向はあるんでしょうか、それとも、地域をしっかりと見つめて、活動しているんでしょうか。

○委員

過去のディレクターが頭浮かびますけど、例えばAさんは愛知県の出身で、今、静岡に根を張ってやっています。半分ぐらいが県外出身でこの地域ではないです。人とのつながりを、ここにいるとそのまま社会人になっても生かせるんだと言って、愛知県の出身者が、今、この県内で働いている例があります。

ですから、地域のためにというよりは、このフューチャーセンターっていろんな大人と会うので、利害関係のない大人のつながりをそのまま社会人になって持ちたい。就職しても、いわゆるメンター役の大人がすぐ近くにいるということです。ただ、半分ぐらいは東京というか、全国、海外志向の人たちもいます。これを機にチャレンジしたい、さらにチャレンジしたいということで、東京へ行ったり、全国へ行ったり、世界へ飛び出した者もいます。

ですので、一概に地域ということよりも人のつながりをどう見るかです。東京に行った人たちが、それに不義理をしているかということ、そんなことは全然なくて、それこそオンライン上ではまだまだつながっていてということです。

地域に留まることを大人は希望されますし、そういうプレッシャーも私のところにありますけど、それは彼らが決めることであって。ただ、住民票がどこにいるかって、そんなに重要ですかと僕のほうでは感じている次第です。余計なことも申し上げます。

○委員長

そのほかいかがでしょうか。

○委員

委員の、今のこの事例発表の中での、オンラインコミュニケーションですけど、これは学生さんだけじゃなくて、一般の方もコミュニケーションに参加されるということですか。あと、例えばどれくらいの方が参加されたというか、人数的に把握できている部分がありましたら、参考に教えていただければと思います。

○委員

もちろん、誰でも入っていましたので、学生だけではないです。300ちょっとだったと思いますけれども、でコミュニケーション。もちろん、毎日、積極的な人ばかりではないですけど、登録している人は300ぐらいだったと思います。

○委員長

そのほか、いかがでしょうか。

○委員

最後のほうで、学生の就活がちょっと変わってきているようだというお話がありましたが、結局インターネットの時代になると、自分で検索したいと思った情報はたくさん入ってくるわけですけども、一見必要がないように思えるような情報であったとしても、そこに重要な気付きやヒントがあるはずです。一昔前と違って、インターネットは情報を入手することが容易であると同時に、情報を絞って入手することになりますから、逆に言うと、狭い範囲でその情報を入手することが可能になるツールかなと思います。

そうすると、学生も、就活をするにはいろんな資格をはじめとする「武器」を持たないといけなみみたいな話になって、本質的なところが見えなくなってしまいます。やはり自分が思っていることを相手に伝えて、それに共感を得て、それによって職を得ていくところがあると思います。それをせずに、「武器」をもととすることが、逆にリスクになっているのかなと思います。

多少強引かもしれませんが、社会教育人材とは何かということを考えたときに、そういった状況に陥っている人たちを、いわば、そうじゃないんだよと気付かせる仕組みをつくってくれる人が必要なのだろうと思います。そういう意味で、委員の取組は、大変重要だと思います。これからもぜひ続けていただきたいと思います。

その上で質問ですが、フューチャーセンターを運営していく中で、先ほど申し上げたコミュニケ

ーションの取り方なども含めて、委員のほうで、もう少しこういう工夫をしていこうかなという点について、現状を踏まえて思っているところがあれば、教えていただくとありがたいです。

○委員

世の中の情報に私が勝つことは、多分無理ではあるんですけど、私がちょっと希望を見出しているのは、探究学習です。探究学習を、本質的なものをもしやっていくとしたら、この情報と戦えるんじゃないかな。いろんな情報が入ってきたときに、本当にそうかなとか、自分にとってはどうなのかということ、自分事にする力が子供たちに育ってくれば、この就活の問題も少し本質的なものに近づいていくんじゃないかなというのは、ちょっと希望を持っています。

今、現状を変えるところは、私の手の届く範囲ではやっていきたい、やっていくのが僕の役目ではあると思うんですけど、ちょっと希望を持っているのは、本質的な探究学習をやっていくことによって、この情報との付き合い方というか、本質的なものに近づけるんじゃないかなというのは、ちょっと希望として持っているところです。

○委員

どうもありがとうございました。

○委員長

お二方の委員の皆様、発表のほう、ありがとうございました。

最後に、私からコメント、少しだけさせていただこうと思います。委員の最後のスライドに出てきている、この場と仲間と情報は、第37期という社会教育委員会があったんですけど、「誰一人取り残さない社会教育の在り方」をやったときに、孤立を防ぐ、そのとき、どういうふうに孤立の現状を防いで、つながるようにしていったらいいのかというときに出てきたのが、この仲間と場と情報でした。何かやりたいがやってみようって、そういう学びにつながっていくときの条件って、やっぱりこれなんだと、過去の検討結果と照らし合わせて、思いました。

委員に発表していただいたPTAですけど、社会教育団体で、そもそもParent and Teachers Associationなだけなので、PとTの関係って、別にTeacherが、その学校の業務としてそれやってくれとかそういう話ではなくて、保護者の大人と先生が、それは垣根を越えて、まあ楽しくやりましょうみたいな、多分それが始まりなんです。

そういうのを考えると、委員のフューチャーセンターというところに、オープンな雰囲気、理念

の下、立場や肩書き、役割、年齢や経験、性別などの違いを歓迎し、多様な見方、考え方、意見を尊重する場としてありました。人はいろんな役職とか立場とかあるけど、お互い生きている人間で集まって、お互いのいろんな考えを分かち合って、共有して、そこから何かを見つけようよみたいな。PTAはそうなり得る団体ではないかと考えました。子供のためになると、でも、それだから集まるんでしょけど、もうちょっと気楽にいい団体かなって私は思っています。

委員が最後に、ピラミッドじゃなくて、ネットワークで、単独のPTA、地域のPTAがつながってくとおっしゃっていました。このフューチャーセンターもそういうこと言っているし、やっぱりつながる、今回のこの委員会で考えていきたい「つながる」というのは、非常に重要なんだなと思って、聞いていました。

人材を考えると違うコメントになっているかもしれないですけど、私たちがこれから考えていきたい社会教育を支える組織というか、人と人がどうつながって、集団になったりしていったらいいのかの考え方としては、フラットにつながっていくというか、立場を超えて、多様性を認めてつながっていくというのがいいのかなと、今日、お二方の発表を聞いて感じた次第です。

○委員長

最後の部分、社会教育人材に関する調査、今後行っていく中で、本日、これでいきたいという案を提示いたしましたので、いろいろな部分、御意見をいただき、また可能な限り御承認をいただければと思っております。

第3回の協議を踏まえて、調査の組立てを変更しまして、皆様から御意見いただいた改善案を基に、調査の設問内容や回答方法、選択肢について協議し、案を提示したわけですが、それを可能な限り決定していきたいと思えます。回答期間、データの収集方法等の詳細についても、ほぼ決めていきたいと思えます。

それでは、事務局から調査案の説明をお願いします。

○事務局

それでは、お手元の資料2を御覧ください。

今回の第2案で、3つの人材の仮説を提示することに伴って、必要と考える人材を明確に3つに分けて表記するようにしました。そのとこで、1番、2番、3番と、少し強調して書かれているところがそこに当たります。また、4象限の図の縦軸を、知識から「知識も含むスキル」へ、横軸を意欲から「意欲・態度へ」と改めました。

続いて、資料3の1を御覧ください。

地域で社会教育を担う人材の現状調査としまして、こちらが第2案です。目的、対象者、調査方法、回答期間、回答方法は前回から変更ありません。回答期間については、新しい案を示させていただきました。本日の協議の中で決定していただければと考えております。

資料3の2には、第3回の協議を踏まえて、調査の組立を変更し、皆様から御意見をいただいた改善案を示させていただきました。第1案からの改善のポイントについて、簡単に確認していきます。

まず、アンケートの冒頭に、回答に当たってという説明を追加して、第39期静岡県社会教育委員会で検討しております、3つの人材の仮説を提示させていただいています。これにより、回答者の皆様には、これらの仮説を念頭に置いて、御回答いただく形式とさせていただきました。

大設問3につきましては、社会教育における人材の現状をより詳細に把握することを目的とし、設問を再設計いたしました。具体的には、学びの場をつくる人、広げる人、支える人のそれぞれについて、意欲とスキルの側面から4段階評価で御回答いただく形式としました。この変更によって、回答結果を4つのフェーズに分類することが可能となり、大設問4以降の設問とのクロス集計など、多角的な分析が行いやすくなります。

大設問4は、人材以外の現状を把握することを目的に設問を設計し直しました。

大設問5については、選択肢の内容をより具体的に分解をしまして、3つ選択する形式に変更をいたしました。また、回答者の皆様への負荷と設問内容のバランスを考慮しまして、第3回の資料の4の2、設問の6は、今回、削除させていただくことにしました。

以上が、第2案の主な変更点です。

本日、皆様のお手元にあるのは、紙媒体で答えていただく場合の質問紙になっています。実際はGoogleフォームで答えていただくことが主になるので、今からモニターのほうに、実際の見た目、こういうふうになりますというのを示させていただきます。

答え方としては、1がこういうふうを選択できるようになっております。その下はラジオボタンで自分の所属を選んでいただきまして、4件法で選んでいただくようになっています。これが、大設問3、大設問4、こういう見方で続いていきます。大設問5については、これだけ項目がある中から3つ選んでいただくという答え方です。最後に、自由記述も設けさせていただいております。

今回の改善のポイントの中でも、特に重要視しているのが大設問3の変更点です。大設問3につきましては、社会教育における人材の現状を4象限で把握することを目的として、再設定しました。つきましては、第3回委員会までの協議も踏まえ、今回の協議では、特にこの大設問3の文言につ

きまして、皆様に納得いただけたらいいよう、特に時間をかけて御議論いただきたいと考えております。説明は以上です。

○委員長

特に、大設問3について御意見いただければと思いますが、そこに限らず、できるだけ御意見をいただければありがたいです。あと、回答期間は本日決定したいと思いますので、最終のところでは、そこは承認を諮りたいと思います。

今日、できる限り、皆さんの御意見をいただきながらも合意は諮っていきたいとは思いますが、ちょっと検討したほうがいいところが残った場合には、ワーキンググループで引き取って、その回答期間に合うところまでで決定していきたいと思います。その際は、事務局から確実に皆さんに、こういうふうになりましたと情報は共有させていただきたいと思います。その点、御了承いただければと思います。

それでは、皆様から御意見ございましたら、よろしくお願いします。

○委員

まず、回答の期間ですけど、今、案ですと8月21日までになっておりまして、次回が8月28日ですよね。

○委員長

はい。

○委員

今回は、図書館の視察があるから、特にこの場では、例えばアンケートの集計結果とか集約などは、次の第5回では課題として出てこないですか。

○委員長

元データの単純集計は出せば出す。クロス集計とか、もう少し分析かけたものについては10月に示したいというスケジュール感です。

○委員

いや、そのところがどうなのかな。その絡みで、この集計結果が議題に上がってくるようだったら、多分、集約する期間が短いのかなと感じたものですから。お答えになってくれる人も、Googleフォームだけではなくて、紙ベースでお答えになってくれる人がいらっしゃるかもしれません。

○委員長

苦手な方には紙でということになるかと思えますね。

○委員

そうすると、もうちょっと時間かかるのかなと思いました。

○委員長

今日の次第の最後に、39期の予定表があります。8月21日を締切りとはしますが、8月28日に調査結果を考察する予定ではないです。元データの単純集計ぐらいは、出せば出すぐらいの予定でいますので、早める必要ないかなと思っています。第6回で調査結果の考察をしても、今年度中に教育長さんとか教育委員会に報告するにしても間に合うかなという予定で考えておりますので、そういうところで8月21日案をお出ししております。

○委員

分かりました。

○委員長

そのほか、いかがでしょうか。

○委員

私も、このアンケート、現状調査の最初の通知ですが、回答の対象者、各市町の関係課の担当者ということは、それぞれの市町から、一人だけ回答してくださいという形になりますか。

○委員長

そうですね。

○委員

そうすると、結構、答える方がすごく責任重大というか。その方が回答するときに、例えば最初の質問項目で、「意欲のある人が十分いると感じていますか」といったときに、例えば私たち静岡市だったら、あなた、これ答えなさいといったときに、十分いると感じるか感じないか、どうしよう、自分の丸のつけで、その市が満たされているかどうかとなってしまうような気もするんですが。もう少し調査をする人を増やしても、もし県の方の負担が大きくなければ、せつかく回答期間も1か月以上取りますので、それぞれの市町で社会教育に関わっている、せめて課とか係で一人とか、なるべく多くの方に答えていただいたほうが、より現在に近いものが出てくるのかなと思ったんですが。その辺りは、あえての1市1回答でよろしいでしょうか。

○委員長

どうですか。社会教育委員は複数、どの市町もいるので、その方たちという、それなりのボリュームになるので。それに対して、そうすると市町が一人じゃなくてもいいといえいいですね。ただ、どう割り振るかですね。

○委員

これって、各市町一人だったら、もしかしたら生涯学習課長さんとか社会教育課長さんが代表して、答えるみたいになってしまわないだろうか。というと、35回答しか得られないってことですよね。実際の現場の、最前線にいる社会教育関連職員さんたちはどう考えているのかは、どうくみ取るのかなという点について、ちょっと疑問に感じました。

私、市の社会教育委員もやっているの、市の社会教育委員会をやっていると、必ずあの人とあの人、5人や10人顔が浮かんでしまうので、その人たちの意見はどこに行ってしまうのかなというのは、ちょっと疑問に思ったところです。

○委員長

何か、いいアイデアありますか。市の規模で、全然違うものですから。

○委員

社会教育委員さんは、全市町の社会教育委員さんを対象で、政令都市も含めてやられますか。

○委員長

政令都市を含めるですね。

○委員

政令都市を入れると35市町になると思うんです。政令都市を除いて、県の社協連だと五百人とか、社会教育委員さんがいらっしゃいます。

あと、行政も、例えば、私は、牧之原市ですけど、社会教育を担当している社会教育課がごさいますけど、その下に係が分かれているものですから、多分、行政一人ってなると、先ほどおっしゃったように、課長さんが答えざるを得ないのかなって感じました。本当にもっと現場の声を聞きたいのなら、もう少し下の係くらいの担当者にお答えしてもらったほうが、もう少し実態に合った答えが出てくるのかなという気がいたしました。

○委員長

市町の社会教育委員も市町で人数違うんですね、実は。でも、一律何人だけに聞きますという、僕はどうして答えられないのかみたいなことが生じてしまう。

○委員長

委員に個別に委嘱していますから、平等に聞かないといけないと思うんです。今思ったのは、1市町に1アンケートを取るのではなくて、5ないし10とか決めて、回答者の選び方は市町に任せる。そんな面倒くさくて、何でこんなこと県はお願いするんだと言われちゃうのかな。でも、例えば係長以上とか、何とか以上という、それもその市町によって役職の名前も違うし、ちょっと分からないので、その市に5票とか投げて、5人ランダムに選んでもらって、答えてくれませんかみたいなふうにはしますか。

○委員

アンケートの目的によると思います。恐らく、社会教育委員の方々にインタビューを行う、本当に社会教育の現場で今いろいろやっていることについて、率直な声を集めようということだと思い

ます。行政については、行政職員の生の声を集めたいのか、それとも市あるいは町としての方向性や現状を把握したいのか、どちらを目的にするかによって変わってきます。

要するに、生の声を集めたいのであれば、何人であろうと構わないと思うのですが、いわゆる地域の実情について、市や町の認識を聞きたいのであれば、あまりたくさんの人に答えてもらっても困るので代表者ということになるのだと思います。

役所の場合には、当然、決裁が必要となりますので、公式な回答となると、確かに、かなり限定的な回答しか返ってこない可能性はあります。ただ、町全体、あるいは市全体としての認識を聞くのであれば、それでやむを得ないのかなとも思います。

そうではなく、社会教育委員会について感じているところについて担当者の生の声を聞くのであれば、むしろ制約なしに、担当の方が自由にお答えください、あるいは、何人でも構わないのでお答えくださいということでもいいのかもしれませんが、いずれにしろ、アンケートの目的によるのだろうと思います。

そのあたりはいかがでしょうか。

○委員長

今回、その現状把握をしたい、この仮説に対して、実際、今、どんな状況なのかを知りたいところが、大きな調査の意図としてはあるわけです。でも、その現状把握を、その市とか町、行政体としてどう認識しているかで聞くか、関わっている人それぞれがそれぞれにどう思っているかで聞くかというところですよね。

私は、1票でも、その1票を誰かが責任持ってやれと言うよりは、答えるに当たって、何課だとこんな感じ、何課だとこんな感じというのを、例えば課長さんが代表で答えるにしろ、こんな感じで答えていいかなみたいな、決裁じゃないけれど、合意形成を図って書いてくれれば、それが一番理想かなとは思っていましたが、そういうふうにはならず、答えといてみたいと言われた人が、過度に責任だけを感じてしまっているのかのようになるのであれば、何人かランダムに選んで、お答えくださいみたいな感じで依頼してもいいのかなと思います。

どちらにしても、負担感はなく、すんなり答えてもらえるのが一番ありがたいですね。私の立場からそのぐらいですが。皆さん、どうですか、どう聞きますかね。当事者からコメントいただけますか。

○委員

委員の皆さんがおっしゃるように、その市の意向が聞きたいのであれば、回答を一ついただければいいのではと思います。誰が回答するかによって、多少のブレは生じると思いますが、市全体の回答として提出する場合は、必ず課内で合意を得てから提出します。ですので、皆さんがご心配なさっている「最前線の社会教育関連職員の意見が反映されないのでは」ということにはならないと思います。

○委員

うちの大学も役所なので、その理解でいくと、職員さんそれぞれでやっても、あまり意味がないようにも思います。本当に個人で答えるというのは、業務上ないんじゃないですかね、基本的に決裁を取るのです。

5人が全然違うものを作って、決裁される場所あるのかもしれませんが、どう答えようかって話に、そこにバイアスはかかるので。基本的に、その市で一人回答をいただくことが、一番スムーズじゃないかなとは思っています。それぞれ5人取ったからといって現状が分かるかという、それもそれでバイアスはかかっているようにも思います。自治体の職員の方に個人的なことを聞くのは、ちょっと業務上ないのではないかなと僕は理解をしています。

○委員

現場の生の声が必要なのであれば、このアンケートとは別のアンケートを行ってみては、と思います。しかし、今期の諮問内容に必要なかどうかは判断つきかねます。

○委員長

それでは、1市町1回答ということでよろしいですかね。ありがとうございます。

○委員

そうした場合に、例えば、鏡文の対象者が市町関係課のほうが分かりやすいですか。

○委員長

課でね、その筆頭者が。

○委員

関係課と社会教育委員。

○委員

関係課とすると、課がないところもあるのではないかと思いますので、関係部局というのはどうでしょう。際ほどのお話だと課がないところもあるようですね。小さな町ですと、課長というと、すごく偉い人になる気がするんです。

○委員長

でも、関係課はありますね。生涯学習課はなくても、社会教育に関わる部署はありますね。関係課だからいいですよ。

○委員

全然こだわるものではありませんので、要するに通じるのであれば。

○委員長

では、関係課で。最終的には調整します。そのようにしていきます。

そのほか、いかがでしょうか。

○委員

内容ではなく大変細かいところで恐縮ですけれども、7ページの下から3つ目、「関わらず」とありますが、これは、本来は誤用で、漢字で書くなら本来は「拘わらず」となります。もっとも、ふだん使わない表現なので、ひらがなにしておいていただいたほうがいいと思います。細かいところで申し訳ありません。

○委員長

これは、ひらがなで。

○委員

ひらがなのほうがいいと思います。

○委員長

そのほかはいかがでしょうか。

○委員

これも細かいことで、設問3番で質問が6個あるんですけど、1から4までは文末が「とを感じる」で、5、6に関しては「いる」と分けている意味が特になければ、同じように「とを感じる」で統一されるべきかと思います。あるいは、感じることについて答えてくださいということであれば、十分「いる」という表現も。どちらかがよいかと思います。

○委員長

5と6も、「十分いると感じる」でしていきたいと思います。

そのほか、いかがでしょうか。

○委員

5番の最初の項目のところ、学校や会社、役所などが、「役所など」でいいのか「行政など」のほうがいいのか、細かいですけど。その辺り、いかがでしょう。

○委員長

組織というと行政？でも、会社というの？会社。事業所とか言うの？

○委員

企業などとか。

○委員長

企業。

○委員

行政・企業などとか。でも、会社が企業か。学校や企業。各種団体。

○委員長

などが入っているんで。

でも、役所って役場のところもあるんですよ。

○委員

細かいんですけど、でもあるんですよ。

○委員

それこそ役所的には、ここ行政という言い方が一番分かりやすいと思います。すんなり来ると思
います。全部、行政という言い方していますので。

前の4番の中で企業という言い方しているので、ここも会社ではなく企業と捉えられたらいいの
かなと思いました。

○委員長

では、「企業」「行政」でいいですかね。

○委員

先ほど、設問3の文末を「感じる」と統一しましたが、4も同じように「当てはまると感じる
番号」とありますので、こちらも「十分ある」という言い切りではなく、と「感じる」をつけるよ
うな方向ではいかがでしょうか。

○委員長

では、みんな「感じる」で。

○委員

つけるか取るか、どちらかだと思います。

○委員長

そうですね。どっちも感じるかどうか聞いているのに、片一方は「感じる」が入って、片一方は
入っていないのも変ですね。「感じる」入ったほうが柔らかいなら入れましょう。だらだら長い文章

になると感じる場所は調整して、4の設問をいい表現にしたいと思います。「感じる」で終わる設問にしたいと思います。

○委員

私も大変細かいことで恐縮ですけど、設問4の9、電子メールやSNS、LINE、YouTube、Xなどですけど、ここにあえて紙媒体がなくて、インターネットツールみたいなものを活用してできているのかどうかを聞きたいのか、広報活動ができているのを聞きたいのかどうかによって、紙媒体が入る、入らないが、設問の意味が変わってくるのかなと思いました。

先ほど、アンケート自体を、Googleフォームでできない方もいるかもしれないので、紙でも取っておっしゃったので、紙媒体での広報もまだまだ活用されていると思ったので、それはいかがでしょうか。ということと、割と小さいプロジェクトの情報発信って、Xよりもインスタグラムのほうが今は多いです。細かくて申し訳ないですけど、そちらかなと思いました。

○委員長

結構、インスタグラムが使われていますよね。

○委員

割と年代問わず。

○委員長

そうですね、年代問わず使われていますね。

情報発信や連絡のほうが、多分、比重の高い設問とは思うんだけど。どうでしょう。

○委員

まだまだ、例えば学校に発信されるものについては、結構、子供を対象に、チラシが多い、紙媒体が多いかなと思いますけどどうでしょう。

○委員

そのように思います。

○委員

今の件は、チラシよりはデータの方がよいのではないのでしょうか。最近、保護者がアプリに登録して、そこにチラシのデータが送られてくるようになったのではないのでしょうか。

○委員

メール配信ですね。

○委員

メール配信、そうですね。

チラシ自体をもらってくることも大分なくなった気がするのですが、まだ学校で配っていますか。

○委員長

配っているそうです。

○委員

そうなのですか。自分のところの学校の連絡は、データで送られてくるほうが多くなってきたように感じていたので、そう思っていました。失礼しました。

○委員

学校で配るだけじゃなくて、地域の活動って、公民館に行ったときに並んでいるのを見て情報を集めてくる。私、紙が好きだったりするので、そういう情報発信もあるのでは。それを活発にしているのもありなんじゃないかな。

○委員

学校として、そういった広報的なものを受ける立場ですけど、地域の方は皆さんチラシをお作りになっていて、持参して会いに来てくださるというパターンが圧倒的に多いです。デジタルデータであればとお願いしたり、ない場合には、PDF等に加工して生徒や保護者には配信していたりしている。そんな状況ですので、紙媒体でお作りになっていることが多いと実感しております。

○委員

メール等だと、そのまま情報が流れてしまうことが多々あって。保護者も地域の人も紙媒体で欲しい人は、まだまだ一定数いるなと思います。たくさんメールとかだと、保護者、LINEだったり、メールだったり、次から次へといろんな公式LINEだ、何だというのがたくさん来ちゃうので、その中に埋もれてしまっていて分からないから、来たものをわざわざ家でプリンターにつないでプリントして、冷蔵庫に貼ってというのが一定数いるのは、私の周りも多いかなと感じています。

○委員長

それでは、「紙媒体・」を最初に入れますか。「紙媒体・電子メールやSNS」を活用して。Xをインスタグラムにしますか。

○委員長

「SNSを活用して」にすれば、みんな知っている。分からなきゃ分からないという現状にすればいいですね。

○委員長

調査全体を通して、答えられるかどうかという御懸念を持ってらっしゃる方もいるかもしれませんが、それならそれで、それが実状。例えば仮説が理解できないということであれば、やはりこの仮説が今後も必要だということであれば、委員会の報告書の中で、その仕組みをまず提案するところを強調するし、そこは理解していただいて、現状を答えていただけるのであれば、その次のステップを提案していくことにすればいいと思うので、答えられるかどうか、それも全て現状把握で行えればと思います。

○委員

今のところ一つだけ。最後、SNSの後に「等」をつけたほうがいいのではないのでしょうか。いろいろと方法はありますので。

○委員長

では、「SNS等」を。

○委員

紙媒体というか、電子メールを挙げていただくのはいいのですし、そこまでいけば、ほとんどカバーしていると思いますけれども、「等」とすれば、答えやすくなるかなと思います。

○委員

そうしますと9が変わりますから、設問5の下から4つ目のSNSも併せて変わってきます。

○委員長

ここは「SNS等」を使って。ここは、どのような地域社会の実現だから、これで聞いてみていいのかな。

9番を変更した関係で、5番の質問の扱いは、ワーキングで1回検討させていただければと思います。

進行がうまくできていなかったのも、皆さんの御意見を全て拾い切れなかったかもしれません。もし、ここはとお気づきの点、おっしゃりたいことがありましたら、事務局に1週間以内にいただければと思います。その後、ワーキングで全体的な調整を図り、最終的に、皆様にこれでいきますとお知らせして、予定どおりでいいですか、7月7日からの回答開始で進めてまいりたいと思います。

本当に細かいところまで、皆様、御指摘、御意見いただきまして、ありがとうございました。また、今後、この調査を基にいろいろ検討してまいりたいと思いますので、どうぞよろしく願いいたします。

今日はこれで協議を終了します。お二人の委員は本当に御発表もありがとうございました。

それでは、事務局から連絡事項をお願いします。

○事務局

本日も活発な御協議、ありがとうございました。それでは、今回のこの調査の内容につきまして、来週の水曜日までに、御意見のある方は課にメールをお願いします。御意見がない方は御連絡いただかなくて結構です。

では、本委員会の会議録につきましては、本日から3週間後を目安に、メールにて皆様に送らせていただきます。また、御自身の御発言の部分を御確認いただきたいと思います。御協力をお願いいたします。

次回の第5回の委員会ですけど、先日、メールさせていただきました、8月28日の木曜日に決まりました。会場は、委員の御厚意で、静岡市立藁科図書館と生涯学習センターとなります。本当にありがとうございます。公共交通機関でいらっしゃる方は、静岡駅の北口からバスが出ておりますので、そちらを御利用ください。そのほか、御不明な点等ございましたら、いつでも事務局まで御連絡ください。事務局からは以上です。

○委員長

以上をもちまして、第4回静岡県社会教育委員会を閉会いたします。次回の8月もまだ暑いかと思えますけど、皆様、御体調は整えてお過ごしいただければと思います。本日はありがとうございました。